

2024 年 5 月 31 日

音楽科

安村 真紀

ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任

2023 年度担当科目一覧表

科目区分 (教養／専門／教職)	科目名	種別 (必修／選択)	開講時期	受講者数
専門	専修実技 1	必修	1 年 前期	4 名
専門	専修実技 2	必修	1 年 後期	4 名
専門	専修実技 3	必修	2 年 前期	2 名
専門	専修実技 4	必修	2 年 後期	2 名
専門	ピアノ A	選択	専攻科前期	1 名
専門	ピアノ B	選択	専攻科後期	1 名
専門	ソルフェージュ 1	選択	1 年 前期	6 名
専門	ソルフェージュ 2	選択	1 年 後期	8 名
専門	伴奏法	選択	1 年 後期	6 名
専門	ステージ実習 1	選択	1 年 後期	21 名
専門	室内楽 A	必修	専攻科前期	1 名
専門	総合芸術論	選択	専攻科前期	3 名
教職	教育実習事前事後指導	選択	2 年前・後期	4 名

2. 教育の理念

音楽は、耳や脳や演奏する身体を通して私たちの感覚に作用し、純粋な喜びをもたらすものである。私自身、受けてきた音楽教育が人生を大きく左右してきたと感じているが、次世代のためにポジティブな影響を継続的に与えるよう研究を続け、受け継いできたもの、そして自身の成長を役立てていきたい。今何を学ぶのか、その選択肢は多様性に満ちているが、音楽を学ぶことを通じてその意味、価値を理解すると共に、広義において他者を尊重し、社会に貢献する心を育てることが教育目標である。

3. 教育の方法

音楽を演奏することにおいて重要な多くの要素は、何年にもわたって探求し洗練し、育んでいかなければならない。またそれには様々に複雑なレベルがあり、相互に関係しあっている。学習に長い時間を要する分野であること、そのため継続的な意欲が大切であることを説き、将来的にも自律的な学習者になれるよう、能力の開発を工夫している。また、本来言葉を越えたコミュニケーションである音楽だが、教育においては、演奏の様々な側面についての学生との対話を大切にしている。問題の所在を明らかにし、どのようなアプローチが必要か、その道筋の様々な局面について、自分自身の答えを見つけさせるよう指導している。また、自ら学習を進められるよう関連科目を通じて繰り返し情報の提供を行っている。演奏において、学んだ知識が浸透したことが十分に認識できるようになるには時間がかかるが、大切なのは多くを知り、それらを活用できるかどうかである。

授業においては、資格や将来のため必要な知識、技能、表現および実践的な指導法を習得させるべく、バランスを考慮し展開している。加えて、学生の習熟度、進度に応じて ICT を活用し、事前事後の学習を促している。数人の学生を対象とした科目では、学生と対話しながら授業を進め、時には学習者同士が「教え合う」ことでも学生の指導技術の向上と共に知識の整理、論理思考の訓練を行っている。準備段階として、該当領域への関心を深め、学生自ら必要な資料収集ができるよう、定期的なアドバイスを行っている。学生がより自主的計画的に学習に取り組めるよう、短期間で達成可能な理解しやすい目標を定期的に設定することで、達成感をより深い学びへの意欲につなげている。

また、様々な発表の機会を経験させることにより、活動の中での学生同士の関係を通じて聴く力、読み取る力、表現する力、共感する力を育成している。音楽的な文脈を認識した上で、自らの身体を通してイメージ・意識を表現すること、表現の方法とその実践を学ぶことは、他者と共感し、コミュニケーションすることにも通じるものである。

4. 教育の成果

積み上げていく要素が強い領域のため、経験が浅い者とある程度の既修者の差が学習の進度に影響を与えることが危惧されたが、前述のようなアクティブラーニングの実施により、学生の意欲向上や理解深化に繋がった。

対話の中で学生と共に課題を見つけ取り組むことで、各々が目的意識を持ち、到達したレベルに意義、達成感を感じた様子が見られた。基本となる知識技術の習得はおおむねできたと考えられる。

主となるのが個人指導であることから、演奏・指導に関する実践力に加え、生活習慣や節度、社会人としての自立支援にもつながるような指導を心掛けている。このことが将来へと繋がり、知ることの楽しさ、喜びを知り、卒業後も生涯にわたり音楽と共にありたいという声を聞くことができるのは喜ばしいことである。

5. 今後の目標

年度により学生の習熟度が異なるため、教授する内容は柔軟に展開する必要があるが、真の理解と、限られた時間の中で、知識実技双方の習熟度をあげるための有機的体系的な教授法、その教育の技術と方法の確立を研究と実践の両面から探っていきたい。学生の更なる積極性を引き出すため、引き続きその興味や関心事に寄り添いつつ、知識欲を刺激促進する授業づくりを進めていきたい。また、卒業後も習得した知識技術を維持発展できるよう、在学中は記録を残させるなどの工夫を、卒業後は引き続きの見守り、必要であれば支援を行っていきたいと考えている。

6. 根拠資料

- シラバス
- 授業資料
- 授業評価アンケート結果
- 授業改善計画書